

## 校異源氏物語・あつまや

つくはやまをわけみまほしき御心はありなからは山のしけりまであなかに思  
いらむもいと人きゝかろくしうかたはらいたかるへきほとなれはおほしはゝ  
かりて御せうそこをたにえつたへさせ給はすかのあま君のもとよりそはゝきた  
のかたにの給しさまなとたひくほのめかしをこせけれとまめやかに御心とま  
るへき事とも思はねはたゝさまでもたつねしり給らん事とはかりおかしうおも  
ひて人の御ほとのとたゝ今世にありかたけなるをもかすならましかなとそよろ  
つに思けるかみのこともははゝなくなりけるなとあまたこのはらにもひめ君  
とつけてかしつくありまたをさなきなとすぎくゝに五六人ありければさまくゝ  
にこのあつかひをしつゝこと人とおもひへたてたる心のありければつねにいと  
つらき物にかみをもうらみつゝいかてひきすくれておもたゝしきほとにしなし  
てもみえにしかたと明暮このはゝ君はおもひあつかひけるさまかたちのなのめ  
にとりませてもありぬへくはいとかうしもなにかはくるしきまでもゝてなやま  
しおなしことおもはせてもありぬへきよをもものにもましらすあはれにかたしけ  
なくおひいて給へはあたらしく心くるしきものに思へりむすめおほかりときゝ  
てなまきむたちめく人ゝもとをなひいふいとあまたありけりはしめのはらの二  
三人はみなさまくゝにくはりてをとなひさせたり今はわかひめ君をおもふやう  
にてみたてまつらはやとあけくれまもりてなてかしつく事かきりなしかみもい  
やしき人にはあらさりけりかむたちめのすちにてなからひも物きたなき人なら  
すとかいかめしうなとあれはほとくゝにつけては思ひあかりていゑのうちもき  
らくしくものきよけにすみなし事このみしたるほとよりはあやしうあらゝか  
にゐ中ひたる心そつきたりけるわかうよりさるあつま方のはるかなるせかいに  
うつもれて年へければにやこゑなどほとくゝうちゆかみぬへく物うちいふすこ  
したみたるやうにてかうけのあたりおそろしくわつらはしき物にはゝかりおち  
すへていとまたくすきまなき心もありおかしきさまにことふえのみちはとをう  
ゆみをなんいとよくひけるなをくゝしきあたりともいはいきおひにひかされ  
てよきわか人ともさうそくありさまはえならすとゝのへつゝこしおれたるうた  
あはせ物かたりかうしんをしまはゆくみくるしくあそひかちにこのめるをこの

けさうのきむたちらうくしくこそあるへけれかたちなんいみしかなるなどおかしき方にいひなして心をつくしあへる中に左近の少将とてとし廿二三はかりの程にて心はせしめやかにさえありといふかたは人にゆるされたれときらくしういまめいてなとはえあらぬにやかよひし所なともたえていとねんころにいひわたりけりこのは、君あまたかゝる事いふ人ゝのなかにこのきみは人からもめやすかなり心さたまりても物おもひしりぬへかなるを人もあてなりやこれよりまさりてことくしききはの人したかゝるあたりをさいへとたつねよらしと思てこの御方にとりつきてさるへきおりくはおかしきさまに返事なとせさせたまつる心ひとつに思まうくかみこそをろかに思なすとも我はいのちをゆつりてかしつきてさまかたちのめてたきをみつきはさりとををろかになどはよも思ふ人あらしと思たち八月はかりとちきりてゝうとをまうけはかなきあそひものをせさせてもさまことにやうおかしうまきゑらてんのこまやかなる心はへまさりてみゆる物をはこの御方にとりかくしておとりのをこれなむよきとてみすれはかみはよくしもみしらすそこはかとない物ともの人のてうと、いふかきりはたゝとりあつめてならへすへつゝめをはつかにさし出るはかりにてことひわのしとてないけうはうのわたりよりむかへとりつゝならはすてひとつひきとれはしをたちゑおかみてよろこひろくをとらする事うつむはかりにてもてさくはやりかなるこくものなとをしへてしとおかしき夕くれなどにひきあはせてあそふ時は涙もつゝますおこかましきまでさすかに物めてしたりかゝる事ともをはゝ君はすこし物のゆへしりていとみくるしとおもへはことにあへしらはぬをあこをはおもひおとし給へりとおつねにうらみけりかくてこの少将ちきりしほとをまちつけておなしくはとくとせめければわか心ひとつにかうおもひいそくもいとつゝましう人の心のしりかたさを思てはしめよりつたへそめける人きたるにちかうよひよせてかたらふよろつおほく思はゝかる事のおほかるを月ころかうの給てほとへぬるをなみくの人にもものし給はねはかたしけなう心くるしうてかう思たちにたるをおやなと物し給はぬ人なれば心ひとつなるやうにてかたはらいたうゝちはぬさまにみえたてまつる事もやとかねてなんおもふわかき人ゝあまた侍れと思ふ人くしたるはをのつからとおもひゆつられてこの君の御事をのみなむはかなき世の中をみるにもうしろめたくいみしきを物おもひしりぬへき御心さまときゝてかうよろつのつゝましさをわすれぬへかめるをしもし思はすなる御心はえもみえは人わらへにかなしうなんといひけるを少将の君にまうてゝしかくなんと申けるにけしきあしくなりぬはしめよりさ

らにかみのみむすめにあらすといふ事をなむきかさりつるおなしことなれと人きゝもけおとりたる心ちしていりせむにもよからすなん有へきようもあないせてうかひたることをつたへけるとの給ふにいとおしくなりてくはしくもしり給へす女ものしるたよりにておほせことをつたへはしめ侍しになにかしつくむすめとのみきゝ侍れはかみのにこそはとこそ思給へつれこと人のこもたまへらむともとひきゝ侍らさりつる也かたち心もすくれてものし給事はゝうへのかなしうし給ておもたゝしうけたかきことをせんとあかめかしつかるときゝ侍しかはいかてかのへんの事つたへつへからん人もかなとの給はせしかはさるたよりしり給へりとり申ゝなりさらにうかひたるつみ侍ましきことなりとはらあしくこと葉おほかる物にて申すに君いとあてやかならぬさまにてかやうのあたりにいきかよはむ人のおさゝゆるさぬ事なれといまやうの事にてとかあるましうもてあかめてうしろみたつにつみかくしてなむあるたくひもあめるをおなしことゝうちゝには思ふともよそのおほえなむへつらひて人いひなすへき源少納言さぬきのかみなとのうけはりたるけしきにていていらむにかみにもおさゝうけられぬさまにてましらはんむいと人けなかるへきとの給この人ついそうあるうたである人の心にてこれをいとくちおしうこなたかなたにおもひければまことにかみのむすめとおほさはまたわかうなとおはすともしかつたへ侍らんかしなかにあたるなんひめ君とてかみいとかなしうしたまふなるときこゆいさやはしめよりしかいひよれることをきて又いはんこそうたてあれされと我ほいはかのかむのぬしの人からもものゝしくおとなしき人なれはうしろみにもせまほしうみる所ありて思はしめしことなりもはらかほかたちのすぐれたらん女のねかひもなしゝなあてにえむならん女をねかはゝやすくえつへしされとさひしう事うちあはぬみやひこのめる人のはてゝはものきよくもなく人にも人とおほえたらぬをみればすこし人にそしらるともなたらかにて世の中をすくさむことをねかふなりかみにかくなるとかたらひてさもとゆるすけしきあらはなにかはさもとの給この人はいもうとのこのにしの御方にあるたよりにかゝる御ふみなもととりつたへはしめけれとかみにはくはしくもみえしられぬものなりけりたゝいきにかみのあたりけるまへにいきてとり申へきことありてなといはすかみ此わたりに時々出いりはすときけとまへにはよひいてぬ人のなにごといひにかあらんとなまあらゝしきけしきなれと左近の少将とのゝ御せうそこにてなむさふらふといはせたれはあひたりかたらひかたけなるかほしてちかうるよりて月ころうちの御方にせうそこきこえさせ給を御ゆるしありて

この月のほとにとちきりきこえさせ給事侍を日はからひていつしかとおほす  
ほとにある人の申けるやうまことに北のかたの御はからひにものし給へとかむ  
のとのゝ御むすめにはおはせすきむたちのおはしかよはむに世のきこえなんへ  
つらひたるやうならむすらうの御むこになり給かやうのきみたちはたゝわたく  
しの君のことく思かしつきたてまつりてにさゝけたること思ひあつかひうしろ  
みたてまつるにかゝりてなむさるふるまひし給人ゝものし給めるをさすかにそ  
の御ねかひはあなかななるやうにておさくうけられ給はてけおとりておはし  
かよはん事ひんなかりぬへきよしをなむせちにそしり申す人ゝあまた侍なれは  
たゝ今おほしわつらひてなむはしめよりたゝきらくしう人のうしろみとたの  
みきこえんにたへ給へる御おほえをえらひ申てきこえはしめ申し也さらにこと  
人ものし給らんといふ事しらすりければもとの心さしのまゝにまたをさなきも  
のあまたおはすなるをゆるい給はゝいとゝうれしくなむ御けしきみてまうてこ  
とおほせられつれはといふにかみさらにかゝる御せうそ侍よくはしくうけ  
給はらすまことにおなしことに思ふ給へき人なれとよからぬわらはへあまた侍  
てはかくしからぬ身にさまく思給へあつかふほとにはゝなるものもこれを  
こと人と思わけたることゝくねりいふこと侍ともかくもくちいれさせぬ人の  
事に侍れはほのかにかなむおほせらるゝこと侍とはきゝ侍しかとなにかしを  
とり所におほしける御心はしり侍らさりけりさるはいとうれしく思給へらるゝ  
御ことにこそ侍なれいとらうたしとおもふめのわらはゝあまたの中にこれをな  
んいのちにもかへむと思侍るの給ふ人ゝあれと今の世の人のみ心さためなくき  
こえ侍に中くむねいたきめをやみむのはゝかりに思ひさたむる事もなくてな  
んいかてうしろやすくもみ給へをかんと明暮かなしくおもふ給るを少将殿にを  
きたてまつりてはこ大將殿にもわかくよりまいりつかうまつりきいゑのこにて  
みたてまつりしにいと経さくにつかふまつらまほしと心つきておもひきこえし  
かとはるかなる所にうちつゝきてすくし侍としころの程にうゑくしくおほえ  
侍てなんまいりもつかまつらぬをかゝる御心さしの侍けるを返々おほせのこと  
たてまつらむはやすき事なれと月ころの御心たかへたるやうにこの人思給へん  
ことをなんおもふ給へはゝかり侍といとこまやかにいふよろしけなめりとうれ  
しく思ふなにかとおほしはゝかるへきことにも侍らすかの御心さしはたゝひと  
所の御ゆるし侍らむをねかひおほしていはけなくとしたらぬほどにおはすとも  
しんしちのやむことなく思ひをきて給へらんをこそほいかなふにはせめもはら  
さやうのほとりはみたらむふるまひすへきにもあらずとなむの給つる人からは

いとやむことなくおほえ心にく、おはする君なりけりわかき君たちとてすきくしくあてひてもおはしまさす世のありさまもいとよくしり給へり両し給所ともいとおほく侍りまたころの御とくなきやうなれとをのつからやむことなき人の御けはひのありけなるやうなを人のかきりなきとみといふめるいきおひにはまさり給へりらい年四位になり給なむこたみのとうはうたかひなくみかとの御くちつからこて給へるなりよろつの事たらひてめやすき朝臣のめをなんさためさなるはやさるへき人えりてうしろみをまうけよかんだちめにはわれしあれはけふあすといふはかりになしあけてんとこそおほせらるなれなにこともたこの君そみかともしたしくつかふまつり給なる御心はたいみしうかうさくにおもくしくなんおはしますめるあたらの人の御むこをかうき、給ほとにおもほしたちなむこそよからめかの殿にはわれもくむこにとりたてまつらんと所ゝに侍なれはこゝにしふくなる御けはひあらはほかさまにもおほしなりなんこれたうしろやすきことをとり申すなりといとおほくよけにいひつくるにいとあさましくひなひたるかみにてうちえみつき、ゐたりこのころの御とくなどの心もとなからむことはなの給そなにかしいのち侍らむほとはいたきにさ、けたてまつりてん心もなく何をあかめとかおほすへきたとひあへすしてつかうまつりさしつものこりのたから物両し侍所ゝひとつにてもまたとりあらそふへき人なしこともおほく侍れとこれはさまことに思そめたる物に侍りた、ま心におほし返みさせ給は、大臣のくらゐをもとめむとおほしねかひて世になきたから物をもつくさむとし給はんになき物侍ましたうしのみかとしかめくみ申給なれは御うしろみは心もとなかるましこれかの御ためにもなにかしかめのわらはのためにもさいはひとあるへき事にやともしらすとよろしけにいふ時にいとうれしくなりていもうとにもかゝる事ありともかたらすあなたにもよりつかてかみのいひつることをいともくよけにめてたしと思てきこゆれば君すこしひなひてそあるとはき、給へとにくからすうちゑみてき、る給へり大臣にならむそくらうをとらんなどそあまりおとろくしきこと、み、と、まりけるさてかの北の方にはかくとものしつや心さしことに思はしめ給らんにひきたかへたらむひかくしくねちけたるやうにとりなす人もあらんいさやとおほしたゆたひたるをなにか北の方もかの姫君をはいとやむことなき物に思ひかしつきたてまつり給なりけりた、なかのこのかみにてとしもおとなひ給を心くるしきことに思てそなたにとおもむけて申されけるなりけりときこゆ月ころはまたなくよのつねならすかしつくといひつるもの、うちつけにかくいふもいかなら

むと思へとも猶ひとわたりはつらしと思はれ人にはすこしそしらるともなから  
へてたのもしき事をこそといとまたくかしこき君にて思とりてければ日をたに  
とりかへてちきりし暮にそおはしはしめける北の方は人しれすいそきたちて人  
とのさうそくせさせしつらひなとよし／＼しうし給御かたをもかしらあらはせ  
とりつくろひてみるに少将なといふ程の人にみせんもおしくあたらしきさまを  
あはれやおやにしられたてまつりておいたち給はましかはおはせすなりにたれ  
とも大將殿のの給ふらんさまにおほけなくともなとかは思たゝさらましされと  
うち／＼にこそかくおもへほかのをときゝはかみのことも思ひわかす又しちを  
たつねしらむ人も中／＼おとしめ思ひぬへきこそかなしけれなと思つゝ、くい  
ゝはせむさかりすぎ給はんもあいなしいやしからすめやすきほどの人のかくね  
んころにの給めるをなと心ひとつに思ひさたむるも中たちのかくことよくいみ  
しきに女はましてすかされたるにやあらんあすあさてとおもへは心あはたゝし  
くいそかしきにこなたにも心のとかにゐられたらすそゝめきありくにかみとよ  
りいりきてなか／＼ととゝこほる所もなくいひつゝ、けて我を思へたてゝ、あこの  
御けさう人をうはゝむとし給けるおほけなく心をさなきことめてたからむ御む  
すめをはようせさせ給君たちあらしいやくことやうならむなにかしらか女こ  
をそいやしうもたつねの給めれかしこく思ひくはたてられけれどもはらほいな  
しとてほかさまへおもひなり給へかなれはおなしくはと思てなんさらは御心と  
ゆるし申つるなどあやくあふなく人の思はむ所もしらぬ人にていひちらしゐ  
たり北の方あきれて物もいはれてとはかり思ふに心うさをかきつらね涙もおち  
ぬはかりおもひつゝ、けられてやをらたちぬこなたにわたりてみるにいとらうた  
けにゐ給へるにさりととも人にはをと給はしとは思ひなくさむめのとゝふたり  
心うきものは人の心也けりをのれはおなしこと思あつかふとも此君のゆかりと  
思はむ人のためにはいのちをもゆつりつへくこそおもへおやなしときゝあなつ  
りてまたをさなくなりあはぬ人をさしこえてかくはいひなるへしやかく心うく  
ちかきあたりにみしきかしと思ひぬれとかみのかくおもたゝしきことにおもひ  
てうけとりさはくめれはあひ／＼にたる世の人のありさまをすへてかゝる事に  
くちいれしとおもふいかてこゝならぬ所にしはしありにしかなどうちなけきつ  
ゝいふめのともいとはらたゝしく我君をかくおとしむることゝおもふになにか  
これも御さいはひにてたかふことゝもしらすかく心くちおしくいましける君な  
れはあたら御さまをもみしらさらましわかきみをは心はせあり物思ひしりたら  
ん人にこそみせたてまつらまほしけれ大將殿の御さまかたちのほのかにみたて

まつりしにさもいのちのふる心ちのし侍しかなあはれにはたきこえ給なり御す  
くせにまかせておほしよりねかしといへはあなおそろしや人のいふをきけはと  
しころおほろけならん人をはみしとのたまひて右の大との按察の大納言式部卿  
の宮などのいとねんころにほのめかし給けれときゝすくしてみかとの御かしつ  
きむすめをえ給へる君はいかはかりの人かまめやかにはおほさんかのはゝ宮な  
との御かたにあらせて時くもみむとはおほしもしなんそれはたけにめてたき  
御あたりなれともいとむねいたかるへきことなり宮のうへのかくさいはひとと  
申すなれと物思はしけにおほしたるをみれはいかにもくふた心なからん人の  
みこそめやすくだのもしき事にはあらめ吾身にてもしりにきこ宮の御有さまは  
いとなさけくしくめてたくおかしくおはせしかと人かすにもおほさゝりしか  
はいかはかりかは心うくつらかりしこのいといふかひなくなさけなくさまあし  
き人なれとひたおもむきにふた心なきをみれは心やすくて年ころをもすくしつ  
る也おりふしの心はえのかやうにあい行なくようゐなき事こそにくけれなけか  
しくうらめしきこともなくかたみにうちいさかひても心にあはぬことをはあき  
らめつかむたちめみこたちにて宮ひかに心はつかしき人の御あたりといふとも  
我かすならてはかひあらしよろつの事我身からなりけりと思へはよろつにかな  
しうこそみたてまつれいかにして人わらへならすしたてまつらむとかたら  
ふかみはいそきたちて女房などこなたにめやすきあまたあなるをこの程はあら  
せ給へやかて帳などもあたらしくしたてられためる方を事にはかになりのため  
れはとりわたしとかくあらたむましとてにしのかたにきてたちゐとかくしつら  
ひさはくめやすきさまにさはらかにあたりく有へきかきりしたる所をさかし  
らに屏風とももてきていふせきまでたてあつめてつしにかいなとあやしきまで  
しくはへて心をやりていそけは北のかたみくるしくみれとくちいれしといひて  
しかはたゝにみきく御かたは北おもてにいたり人の御心はみしりはてぬたゝお  
なしこなれはさりとともいとかくは思はなち給はしとこそ思つれさはれ世にはゝ  
なき子はなくやはあるとてむすめをひるよりめのとゝふたりなてつくりひたて  
たれはにくけにもあらず十五六のほとにていとちいさやかにふくらかなる人の  
かみうつくしけにてこうちきの程なりすそいとふさやかなりこれをいとめてた  
しと思ひてなてつくりふなにか人のことさまに思かまへられける人をしもとお  
もへと人からのあたらしくかうさくに物し給ふ君なれは我もくゝとむこにとら  
まほしくする人のおほかなるにとられなんもくちおしくてなんとかの中ひとに  
はかられていふもいとおこなりおとこ君もこの程のいかめしくおもふやうなる

こと、よろつのつみあるましう思てその夜もかへすきそめぬは、君御方のめのこといとあさましくおもふひか／＼しきやうなれはとかくみあつかふも心つきなければ宮の北のかたの御もとに御ふみたてまつるその事と侍らてはなれ／＼しくやかしこまりてえ思給ふるまゝにもきこえさせぬをつゝしむへきこと侍てしはし所かへさせんとおもふ給るにいとしのひてさふらひぬへきかくれの方さふらはゝいとも／＼うれしくなむかすならぬ身一のかけにかくれもあへすあはれなる事のみおほく侍る世なれはたのもしき方にはまつなんとちなきつゝかきたるふみをあはれとはみ給けれとこ宮のさはかりゆるし給はてやみにし人をわれひとりのこりてしりかたらはんもいとつゝましく又みくるしきさまにて世にあふれんもしらすかほにてきかんこそ心くるしかるへけれことなる事なくてかたみにちりほはんもなき人の御ためにみくるしかるへきわざをおほしわつらふたいふかもとにもいと心くるしけにいひやりたりければさるやうこそは侍らめ人にくゝはしたなくもなの給はせそかゝるをとりの物の人の御中にましり給もよのつねの事なりなときこえてさらはかのにしかたにかくろへたる所しいてゝいとむつかしけなめれとさてもすくい給つへくはしはしのほとゝいひつかはしついでうれしとおもほして人しれすいてたつ御方もかの御あたりをはむつひきこえまほしと思ふ心なれは中／＼かゝる事とものいてきたるをうれしとおもふかみ少将のあつかひをいかばかりめてたき事をせんとおもふにそのきら／＼しかるへきこともしらぬ心にはたゝあらゝかなるあつまきぬともをおしまろかしてなけいてつくい物も所せきまでなんはこひいてゝのゝしりけるけすなとはそれをいとかしこきなさけに思ひければ君もいとあらまほしく心かしこくとりよりにけりと思けり北方このほとをみすてゝしらさんもひかみたらむとおもひねんしてたゝするまゝにまかせてみゐたりまらうとの御ていさふらひとしつらひさはけは家はひろけれと源少納言ひむかしのたいにはすむをのこゝなとのおほかるに所もなし此御方にまらうとすみつきぬれはらうなとほとりはみたらむにすませたてまつらむもあかすいとおしくおほえてとかく思ひめくらすほと宮にとはおもふ成けりこの御方さまにかすまへ給ふ人のなきをあなつるなめりと思へはことにゆるい給はさりしあたりをあなちにまいらすめのとわかき人ゝ二三人はかりして西のひさしの北によりてひとけとをきかたにつほねしたり年ころかくはかなかりつれとうとおほすましき人なれはまいる時ははち給はすいとあらまほしくけはひことにてわか君の御あつかひをしておはする御有さまうらやましくおほゆるもあはれなり我もこ北のかたにははなれたてまつ



るへき人かはつかふまつるといひしひかりにかすまへられたてまつらすくちおしくてかく人にはあなつらるゝとおもふにはかくしひてむつひきこゆるもあちきなしこゝには御物いみといひてければ人もかよはす二三日はかりは、君もゐたりこたみは心のとかに此みありさまをみる宮わたり給ゆかしくてもものゝはさまよりみれはいときよらにさくらをおりたるさまし給ひてわかたのもし人に思てうらめしけれと心にはたかはしとおもふたちのかみよりさまかたちも人の程もこよなくみゆる五位四位ともあひひさまつきさふらひてこの事かのことゝあたり／＼のことゝもけいしともなと申又わかやかなる五位ともかほもしらぬともゝおほかりわかまゝ、この式部のそうにてくら人なる内の御つかひにてまれり御あたりにもえちかくまいらすこよなき人の御けはひをあはれこはなに人そかゝる御あたりにおはするめてたさよゝそに思ふ時はめてたき人ゝときこゆともつらきめみせ給はゝと物うくおしはかりきこえさせつらんあさましさよこの御有さまかたちをみれはたなはたはかりにてもかやうにみたてまつりかよはむはいといみしかるへきわさかなとおもふにわか君いたきてうつくしみおはす女君みしかき木丁をへたてゝおはするをもしやりてものなときこえ給ふ御かたちともいときよらにゝあひたりこ宮のさひしくおはせし御有さまを思ひくらふるにみやたちときこゆれといとこよなきわさにこそありけれとおほゆ木丁のうちにいり給ぬれはわか君はわかき人めのとなともてあそひきこゆ人ゝまいりあつまれとなやましとておほとのこもり暮しつ御たいこなたにまいるよろつのことけたかく心ことにみゆれはわかいみしきことをつくすとみおもへとなお／＼しき人のあたりはくちおしかりけりと思ひなりぬれはわかむすめもかやうにてさしならへたらむにはかたはならしかしいきおひをたのみてちゝぬしのきさきにもなしてんとおもひたる人ゝおなしわかこなからけはひこよなきを思ふも猶今よりのちも心はたかくつかふへかりけりと夜一よあらましかたりおもひつゝけらる宮日たけておき給てきさいの宮例のなやましくし給へはまいるへしとて御そうそくなとし給ておはすゆかしうおほえてのそけはうるはしくひきつくろひ給へるはたにる物なくけたかくあいきやうつきゝよらにてわか君をえみすて給はてあそひおはす御かゆこはいあなとまいりてそなたよりいてたまふけさよりまいりてさふらひのかたにやすらひける人ゝいまそまいりて物なときこゆるなかにきよけたちてなてうことなき人のすさまじかほしたるなをしきてたちはきたるありおまへにてなにとともみえぬをかれそのひたちのかみのむこの少将なはしめは御かたにとさためけるをかみのむすめをえてこそいたはられめ

なといひてかしたるめのわらはをもたるな、りいさこの御あたりの人はかけ  
てもいはすかの君の方よりよくきくたよりのあるそなどをのかとちいふきくら  
むともしらて人のかくいふにつけてもむねつふれて少将をめやすき程とおもひ  
ける心もくちおしくけにことなる事なかるへかりけりと思ていと、しくあなつ  
らはしく思なりぬわか君のはひいて、みすのつまよりのそき給へるをうちみ給  
てたちかへりよりおはしたり御心ちよろしくみえ給は、やかてまかてなん猶く  
るしくし給は、こよひはとのゐにそ今は一夜をへたつるもおほづかなきこそく  
るしけれとてしはしくさめあそはしていて給ぬるさまの返るともく、あ  
くましくにほひやかにおかしければ出給ぬるなこりさうくしくそなかめらる  
、女君の御まへにいてきていみしくめてたてまつればあ中ひたるとおほしてわ  
らひ給こうへのうせ給し程はいふかひなくをさなき御ほとにていかにならせた  
まはんとみたてまつる人もこ宮もおほしなけしをこよなき御すくせのほと  
なりければさる山ふところのなかにもおひいてさせ給しにこそありけれくちおし  
くこひめ君のおはしまさすなりにたるこそあかぬ事なれなとうちなきつ、きこ  
ゆ君もうちなき給て世の中のうらめしく心ほそきおりくも又かくなからふれ  
はすこしも思なくさめつへきおりもあるをいにしへたのみきこえけるかけとも  
にくれたてまつりけるは中くによるつねに思ひなされてみたてまつりしら  
すなりにければあるを猶この御事はつきせすいみしくこそ大将のよろつのこと  
に心のうつらぬよしをうれへつ、あさからぬ御心のさまをみるにつけてもいと  
こそくちおしけれとの給へは大将とのはさはかり世にためしなきまてみかとの  
かしつきおほしたなるに心おこりし給らむかしおはしまさしかは猶この事せ  
かれしもし給はさらましやなときこゆいさや、うのものと人わらはれる心ち  
せましも中く、にやあらましみはてぬにつけて心にく、もある世にこそとおも  
へとかの君はいかなるにかあらむあやしきまて物わすれせすこ宮の御のちの世  
をさへ思ひやりふかくうしろみありき給めるなと心うつくしうかたり給かのす  
きにし御かはりにたつねてみるとこのかすならぬ人をさへなんかの弁のあま君  
にはの給ひけるさもやとおもふ給へよるへき事には侍らねと一もとゆへにこそ  
はとかたしけなけれとあはれになむ思ふ給へらる、御心ふかさなるなといふつ  
いてにこの君をもてわつらふことなくくかたるこまかにはあらねと人もき、  
けりと思ふに少将のおもひあなつりけるさまなとほめかしていのち侍らむか  
きりはなにか朝ゆふのなくさめくさにてみすくしつへしうちすて侍なんのちは  
おもはすなるさまにちりほひ侍らむかなしさにあまになしてふかき山にやし

すへてさるかたに世のなかを思たえて侍らましなとなん思ふ給へわひては思よりはへるなといふけに心くるしき御有さまにこそはあなれとなにか人にあなつらるゝ御有さまはかやうになりぬる人のさかにこそさりととてもたえぬわさなりければむけにそのかたに思をきて給へりし身たにかく心より外になからふれはまいていとあるましき御事也やつい給はんもいとおしけなる御さまにこそなといとおとなひての給へはゝは君いとうれしと思たりねひにたるさまなれとよしなからぬさましてきよけなりいたくこえすきにたるなむひたち殿とはみえけるこ宮のつらうなさけなくおほしはなちたりしにいとゝ人けなく人にもあなつられ給とみ給れとかうきこえさせ御覽せらるゝにつけてなんいにしへのうさもなくさみ侍など年ころの物かたりうきしまのあはれなりし事もきこえいつわか身ひとつのとのみいひあはする人もなきつくは山の有さまもかくあきらめきこえさせていつもいとかくてさふらはまほしく思給へなり侍ぬれとかしこにはよからぬあやしの物ともいかにたちさはきもとめ侍らんさすかに心あはたゝしく思給へらるゝかゝる程の有さまに身をやつすは口おしき物になん侍けると身にもおもひしらるゝをこの君はたゝまかせきこえさせてしり侍らしなとかこちきこえかくれはけにみくるしからてもあらなんとみ給かたちも心さまもえにくむましうらうたけなりものはちもおとろくしからすさまようこめいたる物からかとなからすちかくさふらふ人ゝにもいとよくかくれてあたまへり物なといひたるもむかしの人の御さまにあやしきまておほえたてまつりてそあるやかの人かたもとめ給人にみせたてまつらはやとうち思いて給おりしも大将殿まいり給と人きこゆれは例の御き丁ひきつくろひて心つかひすこのまらうとはゝ君いてみたてまつらんほのかにみたてまつりける人のいみしき物にきこゆめれと宮の御有さまにはえならひ給はしといへは御前にさふらふ人ゝいさやえこそきこえさためねときこえあへりいか計ならん人か宮をはけちたてまつらむなといふほとに今そ車よりおり給なるときく程かしかましきまてをひのゝしりてとみにもみえ給はすまたれ給ほとにあゆみいり給さまをみればけにあなめてたおかしけともみえすなからそなめかしうあてにきよけなるやすゝろにみえくるしうはつかしくてひたいかみなともひきつくろはれて心恥しけにようゐおほくきほもなきさまそし給へる内よりまいり給へるなるへし御せんものけはひあまたしてよへきさいの宮のなやみ給よしうけ給りてまいりたりしかは宮たちのさふらひ給はさりしかはいとおしくみたてまつりて宮の御かはりにいまゝてさふらひ侍つるけさもいとけたいしてまいらせ給へるをあいなう御あやまちにおしは

かりきこえさせてなむときこえ給へはけにをろかならず思やりふかき御ようい  
になんとはかりいらへきこえ給ふ宮は内にとまり給ぬるをみをきてたゝならす  
おはしたるなめり例の物かたりいとなつかしけにきこえ給ふことにふれてたゝ  
いにしへのわすれかたく世の中の物うくなりまさるよしをあらはにはいひなさ  
てかすめうれへ給さしもいかてかよをへて心にはなれすのみはあらむ猶あさか  
らすいひそめてし事のすちなれはなこりなからしとにやなとみなし給へと人の  
御けしきはしるき物なれはみもてゆくまゝにあはれなる御心さまをいは木なら  
ねはおもほしゝるうらみきこえ給ふ事もおほかれはいとわりなくうちなけきて  
かゝる御心をやむるみそきをせさせたまつらまほしくおもほすにやあらんか  
の人かたの給いてゝいとしのひてこのわたりになんとほのめかしきこえたまふ  
をかれもなへての心ちはせずゆかしくなりにたれとうちつけにふとうつらむ心  
地はたせすいてやその本そんねかひみてたまふへくはこそたうとからめ時ゝ心  
やましくは中々山水もにこりぬへくとの給へははてはうたての御ひしり  
心やとほのかにわらひ給ふもおかしうきこゆいてさらはつたへはてさせ給へか  
しこの御のかれこと葉こそおもひいつれはゆゝしくとの給てもまたなみたくみ  
ぬ

みし人のかたしろならば身にそへて恋しきせゝのなて物にせむと例のたは  
ふれにいひなしてまきはしたまふ

みそき川せゝにいたさんなて物を身にそふ影とたれかたのまんひくてあま  
たにとかやいとおしくそ侍やとのたまへはつるによるせはさらなりやいとうれ  
たきやうなる水のあわにもあらそひ侍かなきなかさるゝなて物はいてまこと  
そかしいかてなくさむへきことそなといひつゝくらうなるもうるさければかり  
そめにものしたる人もあやしくと思らむもつゝましきをこよひはなをとく返給  
ねとこしらへやり給さらはそのまらうとにかゝる心のねかひ年へぬるをうちつ  
けになとあさう思なすまじうのたまはせしらせ給てはしたなけるまじうはこ  
そいとうるゝしうならひにて侍る身はなに事もおかましきまてなるとかた  
らひきこえをきていて給ぬるにこのはゝ君いとめてたくおもふやうなるさまか  
なとめてゝめのとゆくりかに思よりてたひくゝいひしことをあるましきことに  
いひしかとこの御ありさまをみるにはあまのかはをわたりてもかゝるひこほし  
の光をこそまちつけさせめ我むすめはなのめならん人にみせんはおしけなるさ  
まをえひすめきたる人をもみならひて少将をかしこき物に思けるをくやしき  
まて思なりにけりより給へりつるまきはしらもしとねもなこりにほへるうつ

りかいへはいとことさらめきたるまでありかたし時々みたてまつる人たにたひ  
ことにめてきこゆ経などをよみてくどくのすくれたる事あめるにもかのかうは  
しきをやることなきことに仏の給をきけるもことはりなりややく王品などにと  
りわきてのたまへる五つ千たんとかやおとろくしき物のなれとまつかのと  
の、ちかくふるまひ給へは仏はまことし給けりとこそおほゆれをさなくおほし  
けるよりおこなひもいみしくし給ければよなといふもありまたさきの世こそゆ  
かしき御有さまなれなくちくめつる事ともをすゝろにゑみてきゝゐたり君  
はしのひでの給つることをほのめかしの給ふ思そめつることしうねきまてかろ  
くしからすものし給めるをけにたゝ今の有さまなどを思はわつらはしき心地  
すへれとかのよをそむきてもなと思より給らんもおなしことにおもひなして  
心み給へかしの給へはつらきめみせず人にあなつられしの心にてこそ鳥のね  
きこえさらんすまるまで思給へをきつれけに人の御有さまけはひをみたてまつ  
り思給ふるはしもつかへのほとなどにてもかゝる人の御あたりになれきこえん  
はかひありぬへしまいてわかき人は心つけたてまつりぬへく侍めれと数ならぬ  
身に物おもふたねをやいとゝまかせてみ侍らんたかきもみしかきも女といふも  
のはかゝるすちにこそこのよのちの世までくるしき身になり侍なれと思給へ  
はへれはなむいとおしく思給へ侍それもとゝ御心になんともかくもおほしすて  
す物せさせ給へときこゆれはいとわつらはしくなりていさやきしかたの心ふか  
さにうちとけてゆくさきのありさまはしりかたきをとうちなけきてことに物も  
の給はすなりぬあけぬれは車などゐてきてかみのせうそこなといはれたゝし  
けにをひやかしたれはかたしけなくよろつにたのみきこえさせてなん猶しはし  
かくさせ給ていはほの中にともしかにも思給へめくらし侍ほとかすに侍らす  
ともおもほしはなたすなにごともをしへさせ給へなときこえをきてこの御方  
もいと心ほそくならはぬ心ちにたちはなれんを思へといまめかしくおかしくみ  
ゆるあたりにしはしもみなれたてまつらむとおもへはさすかにうれしくもおほ  
えけり車ひきいつるほどのすこしあかうなりぬるに宮内よりまかて給わか君お  
ほつかなくおほえ給ければしのひたるさまにくるまなとも例ならておはしま  
すにさしあひておしとゝめてたてたれはらうに御車よせており給ふなその車そ  
くらきほとにいそきいつるはとめとゝめさせ給かやうにてそしのひたる所には  
いつるかしと御心ならひにおほしよるもむくつけしひたちとのゝまかてさせ給  
と申すわかやかなる御せんともとのこそあさやかなれとわらひあへるを聞もけ  
にこよなの身のほとやとかなしくおもふたゝこの御かたのことを思ゆへにそを

のれも人々しくならまほしくおほえけるましてさうしみをなをくしくやつし  
てみむことはいみしくあたらしうおもひなりぬ宮いり給てひたち殿といふ人や  
こゝにかよはしたまふ心ある朝ほらけにいそぎいてつる車そひなとこそことさ  
らめきてみえつれなと猶おほしうたかひてのたまふきゝにくゝかたはらいたし  
とおほしてたいふなとかわかくてのころともたちにてありける人はことにいま  
めかしうもみえさめるをゆへくしけにもの給なすかな人のきゝとかめつへき  
事をのみつねにとりない給こそなき名はたてゝとうちそむき給ふもらうたけに  
おかし明るもしらすおほとのもりたるに人々あまたまいり給へはしん殿にわ  
たり給ぬきさいの宮はことくしき御なやみにもあらてをこたり給にければ心  
ちよけにて右大とのゝ君たちなどこうちゐんふたきなどしつゝあそひたまふ夕  
つかた宮こなたにわたらせ給へれば女君は御ゆするの程なりけりひとくもを  
のくうちやすみなとして御前には人もなしちいさきわらはのあるしておりあ  
しき御ゆするのほとこそみくるしかめれさうくしくてやなかめんどきこえ給  
へはけにおはしまさぬひまゝにこそれいはすませあやしうひころも物うから  
せ給てけふすきはこの月は日もなし九十月はいかてかはとてつかまつらせつる  
をとたいふいとおしかるわか君もねたまへりければそなたにこれかれあるほと  
に宮はたゝすみありき給てにしの方に例ならぬわらはのみえつるをいまゝいり  
たるかなとおほしてさしのそきたまふなかのほとなるさうしのほそめにあきた  
るよりみ給へはさうしのあなたに一尺はかりひきさけて屏風たてたりそのつま  
に木丁すにそへてたてたりかたひらひとへをうちかけてしをん色の花やかなる  
にをみなへしのをり物とみゆるかさなりて袖口さしいてたり屏風のひとひらた  
ゝまれたるより心にもあらてみゆるなめりいまゝいりのくちおしからぬなめり  
とおほしてこのひさしにかよさうしをいとみそかにおしあけ給てやをらあゆ  
みより給も人しらすこなたのらうの中のつほせんさいのいとおかしう色々にさ  
きみたれたるにやり水のわたりいたかきほといとおかしければはしちかくそ  
ひふしてなかむる成けりあきたるさうしを今すこしおしあけて屏風のつまより  
のそき給に宮とは思ひもかけす例こなたにきなれたる人にやあらんと思ておき  
あかりたるやうたいいとおかしうみゆるにれいの御心はすくし給はてきぬのす  
そをとらへ給てこなたのさうしはひきたて給て屏風のはさまにあたまひぬあや  
しとおもひてあふきをさしかくしてみ返たるさまいとおかしあふきをもたせな  
からとらへたまひてたれそ名のりこそゆかしけれとの給にむくつけくなりぬさ  
るものゝつらにかほをほかさまにもてかくしていとうしのひ給へればこの

た、ならすほのめかし給ふらん大将にやかうはしきはひなとも思わたさる、  
にいとつかしくせんかたなしめのと人けの例ならぬをあやしと思てあなたな  
る屏風をおしあげてきたりこれはいかなることにか侍らんあやしきわさにも侍  
るなどきこゆれとは、かり給へきことにもあらずかくうつけなる御しわさな  
れとこの葉おほかる本上なれはなにやかやとの給ふに暮はてぬれとたれとき  
かさらむほとはゆるさしとてなれくしくふし給に宮なりけりとおもひはつる  
にめのといはん方なくあきれてゐたりおほとなあふらはとうろにていまわたら  
せ給なんと人といふなりおまへならぬかたのみかうしもそおろすなるこなた  
ははなれたるかたにしなしてたかきたなつし一よろひたて屏風のふくろにいれ  
こめたる所々によせかけなにかのあら、かなるさまにしはなちたりかく人の  
ものし給へはとてかよふみちのさうしひとまはかりそあけたるを右近とてたい  
ふかむすめのさふらふきてかうしおろしてこ、によりくなりあなくらやまたお  
ほとなふらもまいらさりけりみかうしをくるしきにいそきまいりてやみにま  
ふよとてひきあくるに宮もなまくるしとき、給ふめのはたいとくるしと思ひ  
て物つ、みせすはやりかにをそき人にてものきこえ侍らんこ、にいとあやしき  
ことの侍にこうしてなんえうこき侍らてなむなに事そとてさくりよるにうちき  
すかたなるおとこのいとかうはしくてそひふし給へるを例のけしからぬ御さま  
と思ひよりにけり女の心あはせたまふましきこと、おしはからるれはけにいと  
みくるしき事にも侍かな右近はいかにかきこえせんいま、いりて御せんにと  
そはしのひてきこえさせめとてたつをあさましくかたわにたれもくおもへと  
宮はおち給はすあさましきまであてにおかしき人かな猶なに人ならん右近かい  
ひつるけしきもいとおしなへてのいま、いりにはあらさめり心えかたくおほさ  
れてといひかくいひうらみ給ふ心つきなけにけしきはみても、てなさねとた、  
いみしうしぬはかりおもへるかいとおしければなさけありてこしらへ給ふ右近  
うへにしかくこそおはしませいとおしくいかにおもふらるときこゆれは例の  
心うき御さまかなかの、もいかにあはくしくけしからぬさまに思給はんと  
すらむうしろやすくと返ういひをきつる物をいとおしくおほせといか、きこ  
えむさふらふ人ともすこしわかやかによろしきはみすて給ふなくあやしき人の  
御くせなれはいか、はおもひより給けんとあさましきに物もいはれたまはす上  
達部あまたまいり給ふ日にてあそひたはふれてはれいもか、る時はをそくもわ  
たり給へはみなうちとけてやすみ給そかしさてもいかにすへきことそかのめの  
とこそおそましかりけれつとそひゐてまもりたてまつりひきもなくなりたてま

つりつへくこそ思ひたりつれと少将とふたりしていとおしかる程に内より人ま  
いりて大宮この夕くれより御むねなやませ給ふをたゝ今いみしくおもくなやま  
せたまふよし申さす右近心なきおりの御なやみかなきこえさんとてたつ少将  
いてや今はかひなくもあへい事をおこましくあまりなおひやかしきこえ給そ  
といへはいなまたしかるへしとしのひてさゝめきかはすをうへはいときゝにく  
き人の御本上にこそあめれすこし心あらん人は我あたりをさへうとみぬへかめ  
りとおほすまいりて御つかひの申すよりも今すこしあはたゝしけに申なせはう  
こき給へきさまにもあらぬ御けしきにたれかまいりたる例のおとろゝしくを  
ひやかすとのたまはすれば宮のさふらひにたいらのしけつねとなんなのり侍つ  
るときこゆいて給はん事のいとわりなくゝちおしきに人めもおほされぬに右近  
たちいてゝこの御つかひをにしおもてにてといへは申つきつる人もよりきて中  
つかさの宮まいらせ給ぬ大夫はたゝ今なんまいりつるみちに御車ひきいつるみ  
侍つと申せはけにはかに時々なやみたまふおりゝもあるをとおほすに人の  
おほすらん事もはしたなくなりていみしうゝらみちきをきていて給ひぬおそ  
ろしき夢のさめたる心ちしてあせにおしひたしてふし給へりめのとうちあふき  
などしてかゝる御すまゐはよろつにつけてつゝましうひんなかりけりかくおほ  
しましそめてさらによきこと侍らしあなおそろしやかきりなき人ときこゆとも  
安からぬ御有さまはいとあちきかなるへしよそのさしはなれたらん人にこそよ  
しともあしともおほえられ給はめ人きゝもかたはらいたきことゝ思給へてかま  
のさうをいたしてつとみたてまつりつれはいとむくつけくけすゝしき女とお  
ほしててをいといたくつませ給つるこそなを人のけさうたちていとおかしくも  
おほえ侍つれかのとにはけふもいみしくいさかひ給けりたゝひと所の御うへ  
をみあつかひ給ふとて我ゝこともをはおほしすてたりまらうとのおはする程  
の御たひるみくるしとあらゝしきまでそきこえ給ひけるしも人さへきゝいと  
おしかりけりすへてこの少将の君そいとあい行なくおほえ給このみこと侍らさ  
らましかはうちゝやすからすむつかしきことはおりおり侍ともなたらかにと  
しころのまゝにておはしますへき物をなとうちなけきつゝいふ君はたゝいまは  
ともかくも思ひめくらされすたゝいみしくはしたなくみしらぬめをみつるにそ  
へてもいかにおほすらんとおもふにわひしければうつふしふしてなき給ふいと  
くるしとみあつかひてなにかかくおほすはゝをさせぬ人こそたつきなうかなし  
かるへけれよそのおほえはちゝなき人はいとくちおしけれとさかなきまゝはゝ  
にくまれんよりはこれはいとやすしともかくもしたてまつり給てんなおほし



くんせそさりともしつせの観音おはしませはあはれと思きこえ給らんならはぬ御身にたひくしきりてまで給事は人のかくあなつりさまにのみおもひきこえたるをかくもありけりと思ふはかりの御さいはひおはしませとこそねんし侍れあか君は人わらはれにてはやみ給なむやとよをやすけにいひゐたり宮はいそきていて給なりうち、かき方にやあらんこなたの御かにより出給へはもの、給御こゑもきこゆいとあてにかきりもなくきこえて心はへあるふる事なうちすし給てすぎ給ふほとす、ろにわつらはしくおほゆうつしむまともひきいたしてとのゐにさふらふ人十人はかりしてまいり給ふうへいとおしくうたて思ふらんとてしらすかほにて大宮なやみ給ふとてまいり給ぬれはこよひはいて給はしゆするのなこりにや心ちもなやましくておきゐ侍るをわたり給へつれくにもおほさるらんときこえたまへりみたり心ちのいとくるしう侍をためらひてとめのとしてきこえ給いかなる御心ちそと返とふらひきこえ給へはなに心ちともおほえ侍らすた、いとくるしく侍ときこえ給へは少将右近めましろきをしてかたはらそいたくおはすらむといふもた、なるよりはいとおしいとくちおしう心くるしきわさかな大将の心と、めたるさまにのたまふめりしをいかにあはくしく思ひおとさむかくみたりかはしくおはする人はき、にく、しちならぬことをもくねりいひまたまことにすこし思はすならむことをもさすかにみゆるしつへうこそおはすめれこの君はいはてうしと思はんこといとはつかしけに心ふかきをあはなく思ふ事そひぬる人のうへなめりとしころみすしらすりつる人のうへなれと心はえかたちをみればえ思はなるましうらく心くるしきに世の中はありかたくむつかしけなる物かな我身の有さまはあかぬ事おほかる心地すれとかく物はかなきめもみつへかりける身のさは、ふれすなりにけるにこそけにめやすきなりけれ今はた、このにくき心そひ給へる人のなたらかにておもひはなれなはさらになにかとも思ひれすなりなんとおもほすいとおほかる御くしなれはとみにもえほしやらすおきゐ給へるもくるし、ろき御そ一かさねはかりにておはするほそやかにておかしけなりこの君はまことに心ちもあしくなりたれとめのといとかたはらいたしことしもありかほにおほすらむをた、おほとかにてみえたてまつり給へ右近の君などにはことの有さまはしめよりかたり侍らんとせめてそ、のかしたて、こなたのさうしのもとにて右近の君に物きこえさせんといへはたちていてたれはいとあやしく侍つる事のなこりに身もあつうなり給てまめやかにくるしけにみえさせ給ふをいとおしくみ侍御前にてなくさめきこえさせ給へとてなんあやまちもおはせぬ身をいとおしく、ましけにおもほしわひため

るもいさゝかにても世をしり給へる人こそあれいかてかはとことほりにいとおしくみたてまつるとてひきおこしてまいらせたてまつる我にもあらず人の思ふらむこともはつかしけれといとやはらかにおほときすぎ給へる君にておしいてられてゐたまへりひたいかみなとのいたうぬれたるもてかくして火のかたにそむき給へるさまうへをたくひなくみたてまつるにけをとるともみえすあてにおかしこれにおほしつきなほさましけなることはありなんかしいとかゝらぬをたにめつらしき人をかしうしたまふ御心をとふたりはかりそをまへにてえはち給はねはみゐたりける物かたりいとなつかしくし給て例ならずつゝましき所なとな思なし給そこひめ君のおはせすなりにし後わするゝよなくいみしく身もうらめしくたくひなきこゝちしてすすにいとよく思よそへられ給ふ御さまをみればなくさむ心ちしてあはれになむ思人もなき身にむかしの御心さしのやうにおもほさはいとうれしくなんなとかたらひたまへといと物つゝましくてまたひなひたる心にいらへきこえん事もなくてとしころいとはるかにのみ思きこえさせしにかうみたてまつり侍はなにこともなくさむ心ちし侍てなんとはかりいとわかひたるこゑにていふゑなとりいてさせて右近にこと葉よませてみ給ふにむかひてものはちもえしあへ給はす心にいれてみ給へるほかけさらにこゝとみゆる所なくこまかにおかしけなりひたいつきまみのかほりたる心ちしていとおほとかなるあてさはたゝそれとのみ思いてらるればゑはことにめもとゝめ給はていとあはれなる人のかたちかないかてかうしもありけるにかあらんこ宮にいとよくにたてまつりたるなめりかしこひめ君はみやの御方さまに我はゝはうへににたてまつりたるところそはふる人ともいふなりしかけにゝたる人はいみしき物なりけりとおほしくらふるに涙くみてみ給かれはかきりなくあてにけたかきものからなつかしうなよゝかにかたはなるまてなよゝとたはみたるさまのし給へりしにこそこれはまたもてなしのういゝしけによろつのことをつゝましうのみ思ひたるけにや見所おほかるなまめかしさをとりたるゆへゆへしきけはひたにもてつけたらは大將のみ給はんにもさらにかたはなるましなどこのかみ心におもひあつかはれ給ふものかたりなどし給てあか月かたになりてそねたまふかたはらにふせ給てこ宮の御事ともし比おはせし御有さまなとまほならねとかたり給いとゆかしうみたてまつらすなりにけるをいとくちおしうかなしと思たりよへの心しりの人ゝはいかなりつらならないとらうたけなる御さまをいみしうおほすともかひ有へきことかはいとおしといへは右近そさもあらしかの御めのとのひきすへてすゝろにかたりうれへしけしきもてはなれてそいひし宮

もあひてもあはぬやうなる心はえにこそうちうそふきくちすさひ給しかいさや  
ことさらにもやあらんそはしらすかしよへのほかけのいとおほとかなりしもこ  
とありかほにはみえたまはさりしをなとうちさゝめきていとおしかるめのと車  
こひてひたちとのへいぬ北の方にかうくといへはむねつふれさはきて人もけ  
しからぬさまにいひ思らむさうしみもいかゝおほすへきかゝるすちの物にくみ  
はあて人もなきものなりとをのか心ならひにあはたゝしく思ひなりて夕つかた  
まいりぬ宮おはしまさねは心やすくてあやしく心をさなける人をまいらせを  
きてうしろやすくはたのみきこえさせなからいたちの侍らむやうなる心ちのし  
侍れはよからぬものともににくみうらみられ侍ときこゆいときいふはかりのを  
さなさにはあらさめるをうしろめたけにけしきはみたる御まかけこそわつらは  
しけれとてわらひ給へるか心はつかしけなる御まみをみるも心のおにゝはつか  
しくそおほゆるいかにおほすらんとおもへはえもうちいてきこえすかくてさふ  
らひ給はゝとしころのねかひのみつ心ちして人のもりきゝ侍らむもめやすくお  
もたゝしき事になん思給ふるをさすかにつゝましき事になん侍けるふかき山の  
ほいはみさほになん侍へきをとてうちなくもいとくおしくてこゝにはなに事  
かうしろめたくおほえ給ふへきとてもかくてもうとくしく思はなちきこえは  
こそあらめけしからすたちてよからぬ人の時ゝものし給めれとその心をみな人  
みしりためれは心つかひしてひんなうはもてなしきこえしと思ふをいかにおし  
はかり給ふにかとのたまふさらに御心をはへたてありても思きこえさせ侍らす  
かたはらいたうゆるしなかりしすちはなにゝかかけてもきこえさせ侍らんその  
かたならておもほしはなつましきつなも侍をなんとらへ所にたのみきこえさす  
るなどをろかならすきこえてあすあさてかたきものいみに侍をおほそうならぬ  
所にてすくして又もまいらせ侍らむときこえていさなふいとおしくほいなきわ  
さかなとおほせとえとゝめたまはすあさましようかたはなることにおとろきさは  
きたれはおさく物もきこえていてぬかやうのかたゝかへ所と思てちいさき  
ゑまうけたりけり三条わたりにされはみたるかまたつくりさしたる所なればは  
かくしきしつらひもせてなんありけるあはれこの御身ひとつをよろつにもて  
なやみきこゆるかな心にはぬ世にはありふましき物にこそありけれみつか  
らはかりはたゝひたふるにしなくしからす人けなうたゝさるかたにはひこも  
りてすくしつへしこのゆかりは心うしと思ひきこえしあたりをむつひきこゆる  
にひんなきこともいてきなはいと人わらへなるへしあちきなしことやうなりと  
もこゝを人にもしらせすしのひておはせよをのつからともかくもつかふまつり

てんといひをきてみつからはかへりなんとす君はうちなきて世にあらんこと所  
せけなる身と思くし給へるさまいとあはれなりおやはたましてあたらしくおし  
ければつゝかなくともふことみなさむと思さるかたはらいたきことにつけて  
人にもあはしく思はれいはれんかやすからぬなりけり心ちなくなとはあら  
ぬ人のなまはらたちやすく思のまゝにそすこしありけるかのい糸にもかくろへ  
てはすへたりぬへけれどしかかくろへたらむをいとおしとおもひてかくあつか  
ふにとしころかたはらさらす明くれみならひてかたみに心ほそくわりなしと思  
へりこゝは又かくあはれてあやうけなる所なめりさる心し給へさうしくにあ  
るものともめしいて、つかひたまへとのゐ人のことなといひをきて侍もいとう  
しろめたけれとかしこにはらたちうらみらるゝかいとくるしければとうちなき  
てかへる少将のあつかひをかみは又なきものにおもひいそきてもろ心にさまあ  
しくいとなますとゑんする也けりいと心うくこの人によりかゝるまきれともゝ  
あるそかしと又なく思ふかたの事のかゝれはつらく心うくておさくみいれす  
かの宮の御まへにていと人気なくみえしにおほくおもひおとしてければわたく  
し物に思かしつかましをなとおもひし事はやみにたりこゝにてはいかゝみゆら  
むまたうちとけたるさまみぬにと思てのとかに給へるひるつかたこなたにわ  
たりて物よりのそくしろきあやのなつかしけなるにいまやう色のうちめなども  
きよらなるをきてはしのかたにせんさいみるといたるはいつかはおどるい  
ときよけなめるはとみゆむすめまたかたなりになにこゝろもなきさまにてそひ  
ふしたり宮のうへのならひておはせし御さまどもの思いつれはくちおしのさま  
ともやとみゆまへなるこたちに物なといひたはふれてうちとけたるはいとみし  
やうににほひなく人わろけにてみえぬをかの宮なりしはこと少将なりけりと思  
おりしもいふことよ兵部卿の宮の萩のなをことにおもしろくもあるかないかて  
さるたねありけんおなし枝さしなどのいといえんなるこそ一日まいりていて給ほ  
となりしかはえおらすなりにきことたにおしきと宮のうちすし給へりしをわか  
き人たちにみせたらましかはとて我もうたよみるたりいてや心はせの程をおも  
へは人ともおほえすいてきえはいとこよなかりけるになに事いひたるそとつ  
ふやかかるれといと心ちなけなるさまはさすかにしたらねはいかゝいふとて心み  
に

しめゆひしこ萩かうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉そとあるにお  
しくおほえて

宮き野のこはきかもとゝしらませは露も心をわかすそあらましかてみつ

からきこえさせあきらめむといひたりこ宮の御とき、たるなめりと思ふにいと、いかて人とひとしくとのみおもひあつかはるあいなう大将との、御さまかたちぞ悲しう面かけにみゆるおなしうめてたしとみたてまつりしかと宮は思ひはなれ給て心もとまらずあなつりておしいりたまへりけるを思ふもねたしこの君はさすがにたつねおほす心はへのありなからうちつけにもいひかけ給はすつれなしかほなるしもこそいたけれよろづにつけて思はてらるればわかき人はましてかくや思はてきこえ給ふらん我ものにせんとかくにくき人を思けむこそみくるしきことなへかりけれなとた、心にかゝりてなかめのみせられてとてやかくてやとよろづによからむあらましことを思つゝくるにいとかたしやむことなき御身のほど御もてなしみたてまつり給へらむ人は今すこしなめならすいかはかりにてかは心をと、め給はん世の人の有さまをみ聞にをとりまさりいやしうあてなるしなにしたかひてかたちも心もあるへきものなりけり我こともをみるにこの君にゝるへきやはある少将をこのいゑのうちに又なきものにおもへとも宮にみくらへたてまつりしはいともくちおしかりしにおしはからるたう代の御かしつきむすめをえたてまつり給へらむ人の御めうつしにはいともくはつかしくつゝましかるへきものかなと思ふにすゝろに心ちもあくかれにけりたひのやとりはつれくにて庭の草もいふせき心ちするにいやしきあつまこゑしたるものともはかりのみいていりなくさめにみるへきせんさいの花もなしうちあはれてはれくしからて明しくらすに宮のうへの御有さま思いつるにわかい心ちに恋しかりけりあやにくたち給へりし人の御けはひもさすがに思いてられてなに事にかありけむいとおほくあはれけにの給しかななりおかしかりし御うつり香もまたのこりたる心ちしておそろしかりしも思いてらるは、君たつやといとあはれなるふみをかきておこせ給をろかならす心くるしう思あつかひ給ふめるにかひなうもてあつかはれたてまつることゝうちなかれていかにつれくにみならはぬ心ちし給ふらんしはししのひすくしたまへとある返ことにつれくはなにか心やすくてなむ

ひたふるにうれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかはとおさなけにいひたるをみるまゝにほろくとうちなきてかうまとはしはふるゝやうにもてなすことゝいみしければ

浮世にはあらぬ所をもとても君かさかりをみるよしもかなとなをくしき事ともをいひかはしてなん心のへけるかの大將殿は例の秋ふかくなりゆく比ならひにしことなればねさめくにもものわすれせずあはれにのみおほえ給けれ

はうちのみたうつくりはつとき、給ふに身つからおはしたりひさしうみ  
給はさりつるに山のもみちもめつらしうおほゆこほちし心殿こたみはいとほれ  
くしうつくりなしたりむかしいとことそきてひしりたち給へりしすまゐを思  
ひ出るにこの宮も恋しうおほえ給てさまかへてけるもくちおしきまてつねより  
もななめ給ふもとありし御しつらひはいとたうとけにていまかたつかたを女し  
くこまやかになと一かたならさりしをあしろ屏風なにかのあらくしきなどは  
かの御堂の僧坊のくにことさらになさせ給へり山里めきたるくともをことさら  
にせさせ給ていたうもことそかすいときよけにゆへくしつらはれたりや  
り水のほとりなるいはにあたまひて

たえはてぬし水になとかなき人のおも影をたにと、めさりけん涙をのこひ

て弁のあま君のかたにたちより給へれはいとかなしとみたてまつるにた、ひそ  
みにひそむなけしにかりそめにゐたまひてすたれのつまひきあけて物かたりし  
給ふ木丁にかくろへてゐたりことのついてにかの人はいつころ宮にとき、し  
をさすかにうゝくしおほえてこそをとつれよらね猶これよりつたへはて給  
へとのたまへはひとひかのは、君のふみ侍りきいみたかふとてこ、かしこにな  
んあくかれ給めるこのころもあやしきこいへにかくろへものし給めるも心くる  
しくすこしちかき程ならましかはそこにもわたして心やすかるへきをあらまし  
き山みちにたはやすくもえ思た、てなんと侍しときこゆ人のかくおそろしく  
すめるみちにまろこそふりかたくわけくれなにはかりの契りにかと思はあはれ  
になんとてれいのなみたくみ給へりさらはその心やすからん所にせうそした  
まへ身つからやはかしこにて給はぬとの給へはおほせことをつたへ侍らんこ  
とは安し今さらに京をみ侍らんことは物うくて宮にたにえまいらぬをときこゆ  
なとてかともかくも人のき、つたへはこそあらめあたこのひしりたに時にした  
かひてはいてすやはありけるふかきちきりをやふりて人のねかひをみて給はむ  
こそたうとからめとの給へは人わたすことも侍らぬにき、にくき事もこそいて  
まうてくれとくるしけにおもひたれとなをよきおりなるをと例ならすしいてあ  
さてはかり車たてまつらんその旅の所たつねをき給へゆめおこかましうひかわ  
さすましきをとほ、ゑみての給へはわつらはしくいかにおほす事ならんと思へ  
とあふなくあはくしからぬ御心さまなれはをのつからわかためにも人き、な  
とはつ、み給ふらむと思てさらはうけ給はりぬちかき程にこそ御ふみなどをみ  
せさせ給へかしふりはへさかしらめきて心しらひのやうに思はれ侍らんも今さ  
らにいかたうめにやとつ、ましくてなるときこゆ文はやすかるへきを人のもの

いひいとうたてある物なれば右大将はひたちの守のむすめをなんよはふなるな  
ともとりなしてんをやそのかむのぬしいとあら／＼しけなめりとの給へはうち  
わらひていとおしとおもふくらうなれは出給した草のおかしき花とも紅葉など  
おらせ給て宮に御らむせさせ給ふかひなからすおはしぬへけれとかしこまりを  
きたるさまにていたうもなれきこえ給はすそあめるうちよりたゝのおやめきて  
入道の宮にもきこえ給へはいとやむことなき方はかきりなく思きこえ給へりこ  
なたかなたとかしつききこえ給ふみやつかひにそへてむつかしきわたくしの心  
のそひたるもくるしかりけりのたまひしまたつとめてむつましくおほすけらう  
さふらひひとりかほしらぬうしかひつくりいてゝつかはすさうのものゝものゝ  
中ひたるめしいてつゝつけよとの給ふかならずいつへくの給へりければいとつ  
ゝましくゝるしけれとうちけさうしつくるひてのりぬ野山のけしきをみるにつ  
けてもいにしへよりのふることゝも思いてられてなかも暮してなんきつきける  
いとつれ／＼に人めもみえぬ所なればひきいれてかくなんまいりきつるとしる  
へのおとこしていはせたれはゝつせのともにありしわか人いてきておろすあや  
しき所をなかくめくらしあかすにむかし語もしつへき人のきたれはうれしくてよ  
ひ入給ておやと聞えける人の御あたりの人と思にむつまじきなるへしあはれに  
人しれすみたてまつりし後よりは思ひいてきこえぬおりなけれと世中かはかり  
おもひ給へすてたる身にてかの宮にたにまいり侍らぬをこの大将とのゝあやし  
きまての給はせしかはおもふ給へおこしてなるときこゆ君もめのともめてたし  
とみをききこえてし人の御さまなれはわすれぬさまにの給ふらむもあはれなれ  
とにはかにかくおほしたはかるらんと思ひもよらすようちすぐるほどにうち  
より人まいれりとて門しのひやかにうちたゝくさにやあらんとおもへと弁のあ  
けさせたれは車をそひきいるなるあやしと思ふにあま君にたいめんたまはらむ  
とてこのちかきみさうのあつかりのなりのりをせさせ給へはとくちにぬさりい  
てたり雨すこしうちそゝくに風はいとひやゝかにふきいりていひしらすかほり  
くれはかうなりけりとたれも／＼心ときめきしぬへき御けはひおかしければよ  
ういもなくあやしきにまたおもひあへぬほとなれは心さはきていかなる事にか  
あらんといひあへり心やすき所にて月ころのおもひあまることもきこえさせん  
とてなむといはせ給へりいかにきこゆへきことにかと君はくるしけに思てゐ給  
へれはめのとみくるしかりてしかおはしましたらむをたちなからや返したてま  
つり給はんかの殿にこそかくなむとしのひてきこえめちかきほとなれはといふ  
うひ／＼しくなとてかさはあらんわかき御とち物きこえ給はんはふとしもしみ

つくへくもあらぬをあやしきまて心のとかにもふかうおはする君なればよも  
人のゆるしなくてうちとけ給はしなといふほどあめやゝふりくれは空はいとく  
らし殿ゐ人のあやしきこゑしたる夜行うちしてやかなたつみのすみのくつれい  
とあやうしこの人のみくるまいるへくはひきいれてみかとさしてよかゝる人の  
みとも人こそ心はうたてあれなといひあへるもむくくしくきゝならはぬ心ち  
し給ふさのゝわたりにいゑもあらなくなとくちすさひてさとひたるすのこの  
はしつかたにゐ給へり

さしとむるむくらやしけきあつまやのあまりほとふる雨そゝきかなとうち

はらひ給へるをひ風いとかたはなるまであつまのさと人もおとろきぬへしとさ  
まかうさまにきこえのかれんかたなければみなみのひさしにおましひきつくろ  
ひていたてまつる心やすくしもたいめしたまはぬをこれかれおしいてたりや  
りとゝいふものさしていさゝかあけたればひたのたくみもうらめしきへたてか  
なかゝるものゝとにはまたゐならはすとうれへ給ていかゝし給けんいり給ぬか  
の人かたのねかひものたまはてたゝおほえなきものゝはさまよりみしよりすゝ  
ろに恋しきことさるへきにやあらむあやしきまてそおもひきこゆるとそかたら  
ひ給ふへき人のさまいとらうたけにおほときたればみをとりのみせすいとあはれ  
とおほしけりほともなうあけぬる心ちするに鳥などはなかくおほちゝかきとこ  
ろにおほとれたるこゑしていかにとかきゝもしらぬなのりをしてうちむれてゆ  
くなとそきこゆるかやうの朝ほらけにみればものいたゝきたるもののおにのや  
うなるそかしときゝ給ふもかゝるよもきのまろねにならひ給はぬ心ちもおかし  
くもありけりとのゐ人もかとあけて出るをとするをのくゝいりてふしなどする  
を聞給て人めして車つまによせさせ給ふかきいたきてのせたまひつたれも

くゝあやしうあえなきことをおもひさはきて九月にもありけるをこゝろのわ  
さやいかにしつることそとなけゝはあま君もいとくゝおしく思の外なることゝ  
もなれとをのつからおほすやうあらんうしろめたうなおもひ給そなか月はあす  
こそせちふときゝしかといひなくさむけふは十三日なりけりあま君こたみはえ  
まいらし宮のうへきこしめさむこともあるに忍て行かへり侍らんもいとうたて  
なんときこゆれとまたきこのことをきかせたてまつらんも心はつかしくおほえ  
給てそれは後にもつみさり申たまひてんかしこもしるへなくてはたつきなき所  
をとせめての給ふ人ひとりや侍へきとの給へはこの君にそひたる侍従とのりぬ  
めのとあまきみのともなりしわらはなともをくれていとあやしき心ちしてゐた  
りちかきほとにやとおもへはう治へおはするなりけりうしなとひきかふへきこ



ゝろまうけし給へりけりかはらすきほうさうしのわたりおはしますに夜は明は  
てぬわかき人はいとほのかにみたてまつりてめてきこえてすゝろにこひたてま  
つるに世の中のつゝましさもおほえす君そいとあさましきに物もおほえてうつ  
ふし／＼たるをいしたかきわたりはくるしきものをとていたきたまへりうすも  
のゝほそなかをくるまのなかにひきへたてたれははなやかにさしいてたるあさ  
日かけにあま君はいとはしたなくおほゆるにつけてこひめ君の御ともにこそか  
やうにてもみたてまつりつへかりしかありふれはおもひかけぬことをもみるか  
なとかなしうおほえてつゝむとすれとうちひそみつゝなくを侍従はいとにくゝ  
ものゝはしめにかたちことにてのりそひたるをたに思ふになそかくいやめなる  
とにくゝおこにも思ふ老たるものはすゝろになみたもろにあるものそとおろそ  
かにうちおもふなりけり君もみる人はにくからねと空のけしきにつけてもきし  
かたの恋しさまさりて山ふかく入まゝにも霧たちわたる心ちし給ふうちなかめ  
てよりゐ給へる袖のかさなりなからなやかかについてたりけるか川きりにぬれて  
御そのくれなるに御なをしの花のおとろ／＼しううつりたるをおとしかけ  
のたかき所にみつめてひきいれたまふ

かたみそとみるにつけては朝露の所せきまでぬるゝ袖哉と心にもあらずひ  
とりこち給ふをきゝていとゝしほるはかりあま君の袖もなきぬらすをわかき人  
あやしうみくるしきよかなこゝろ行みちにいとむつかしきことそひたる心ちす  
しのひかたけなるはなすゝりをきゝ給て我ものひやかにうちかみていかゝ思  
ふらんといとおしければあまたのとし比このみちをゆきかふたひかさなるをお  
もふにそこはかとなく物あはれなるかなすこしおきあかりてこの山の色もみた  
まへいとむもれたりやとしひてかきおこし給へはおかしきほどにさしかくして  
つゝましけにみいたしたるまみなどはいとよく思いてらるれとおいらかにあま  
りおほときすきたるそ心もとなかめるいといたうこめいたるものからようゐの  
あさからすものし給しはやと猶行方なきかなしさはむなしき空にもみちぬへか  
めりおはしつきてあはれなきたまやとりてみ給ふらんたれによりてかくすゝ  
ろにまとひありくものにもあらなくにとおもひつゝけ給ひておりてはすこし心  
しらひて立さり給へり女ははゝ君のおもひ給はむことなといとなけかしけれと  
えんなるさまに心ふかくあはれにかたらひ給ふにおもひなくさめておりぬあま  
君はことさらにおりてらうにそよするをわざとおもふへきすまひにもあらぬを  
ようゐこそあまりなれとみ給ふみさうより例の人ゝさはかしきまてまいりあつ  
まるをんなの御たいはあま君の方よりまいるみちはしけかりつれとこの有さま

はいとはれくし河のけしきも山の色もてはやしたるつくりさまをみいたして日ころのいふせさなくさみぬる心ちすれといかにもてない給はんとするにかとうきてあやしうおほゆ殿は京に御文かき給ふ也あはぬ仏の御かさりなどみ給へをきてけふよろしき日なりければいそきものし侍てみたり心ちのなやましきに物いみなりけるを思給へいて、なんけふあすこゝにてつゝしみ侍へきなどは、宮にもひめ宮にもきこえ給ふうちとけたる御有さま今少おかしくていりおはしたるもはつかしけれともてかくすへくもあらてゐ給へり女の御さうそくなと色々にきよくとおもひてしかさねたれと少ゐ中ひたることもうちましりてそむかしのいとなえはみたりし御すかたのあてになまめかしかりしのみ思いてられてかみのすそのおかしけさなどはこまゝとあてなり宮の御くしのいみしくめてたきにもをとるましかりけりとみ給ふかつはこの人をいかにもてなしてあらせむとすらんたゝ今ものくしけにてかの宮にむかへすへんもをときゝひんのかるへしさりとしてこれかれあるつらにておほそふにましらはせんはほいならむしはしこゝにかくしてあらんと思ふもみすはさうくしかるへくあはれにおほえ給へはをろかならすかたらひくらし給ふこ宮の御こともたまひいてゝむかし物かたりおかしうこまやかにいひたはふれ給へとたゝいとつゝましけにてひたみちにはちたるをさうくしうおほすあやまりてもかう心もとなきはいとよしをしへつゝもみてんあ中ひたるされこゝろもてつけてしなくしからすはやりかならましはしもかたしろふようならましと思ひなをし給ふこゝにありけるきむさうのことめしいてゝかゝることはたましてえせしかしとくちおしければひとりしらへて宮うせ給て後こゝにてかゝるものにいと久しうてふれさりつかしとめつらしく我なからおほえていとなつかしくまさくりつゝなかめ給ふに月さし出ぬ宮の御琴のねのおとろくしくはあらていとおかしくあはれにひき給しはやとおほしいてゝむかしたれもくおはせしよにこゝにおひいてたまへらましかは今すこしあはれはまさりなましみこの御有さまはよその人たにあはれに恋しくこそ思ひいてられ給へなとてさる所には年比へたまひしそとの給へはいとはつかしくてしろきあふきをまさくりつゝそひふしたるかたはらめいとくまなうしろうてなまめいたるひたいかみのひまなといとよく思ひいてられてあはれなりまいてかやうのこともつきなからすをしへなさはやとおほしてこれはすこしほのめかい給たりやあはれ我つまといふことはさりとてならし給けんなどゝひ給ふそのやまとことはたにつきなくならひにければましてこれはといふいとかたはに心をくれたりとはみえすこゝにをきてえ思ふまゝにもこさら

むことをおほすか今よりくるしきはなのめにはおほさぬなるへしことはおしやりて楚王のたいのうへの夜の琴の声とすんし給へるもかのゆみをのみひくあたりにならひていとめてたく思ふやうなりと侍従もきゝあたりけりさるはあふきの色も心をきつへきねやのいにしへをはしらねはひとへにめてきこゆるそをくれたるなめるかしことこそあれあやしくもいひつるかなとおほすあま君の方よりくた物まいれり箱のふたに紅葉つたなどおりしきてゆへくならずとりませてしきたるかみにふつゝかにかきたるものくまなき月にふとみゆれはめとゝめ給ふほとにくたものいそきにそみえける

やとり木は色かはりぬる秋なれとむかしおほえてすめる月かなとふるめか

しくかきたるをはつかしくもあはれにもおほされて

里の名もむかしなからにみし人のおもかはりせるねやの月影わさと返りことゝはなくてのたまふ侍従なむつたへけるとそ